



ファインスチール

Autumn 2012

秋



CONTENTS

01 特集1

第10回 金属サイディング

施工例写真コンテスト

05 ファインスチールを使った 建築設計例 303

川に寄り添う家

五角形のたたずまい

設計：水石 浩太／水石浩太建築設計室

09 板金工事に関する用語集その22

11 建築めぐり

テーマ建築 10 丸山雅子

13 街でみかけるファインスチールの施工例 その12

一般社団法人 日本鉄鋼連盟

第10回 金属サイディング 施工例写真コンテスト

(主催：日本金属サイディング工業会 後援：一般社団法人 日本鉄鋼連盟)

日本金属サイディング工業会が一般社団法人 日本鉄鋼連盟の後援により、平成23年7月1日～10月31日に実施した「第10回金属サイディング施工例写真コンテスト」について、ご応募いただいた施工例の写真を中心にご紹介します。



中野 久美さん

建物を設計するとき、こちらからの押し付けにならないように心掛けています。オーナーの好みや外観の形状にあわせ、素材や色彩を提案・決定していますが、震災の影響もあり、他の素材より軽い金属サイディングの提案も増えています。素材感を生かしてデザインに組み込んでいきたいと思います。受賞、感激です！有難うございました。

新築部門 最優秀賞

草処建設株式会社 (群馬県)

家のデザインにあわせて、金属サイディングを提案していましたが、重くなりすぎないように木材と左官と併せての施工となりました。家の形状とデザイン、素材、色のバランスの調和がとれたと思います。

●江口特別審査委員のコメント

家全体のフォルムが、金属サイディングによく合っています。はじめから金属サイディングありきで、このデザインが決まったのでしょうか。異素材の 木 との相性も良いですし、このなめらかなカーブの屋根は、まさに金属サイディングの一番得意とするところです。窓も、間取りと相談しながら、外観を綺麗にまとめています。この深い藍色、光によっては群青色に見える色合いは、ナチュラルな木の風合いと相まって、日本の伝統を継承するモダンなデザインとなっています。煙突が、また、いいですね！



●杉田特別審査委員のコメント

どっしりとした重厚感のあるデザインの住宅ですが、それでいてリズムカールに並んだ縦長のサッシが、外壁の金属サイディングとともにシャープなイメージを建物に与えてくれるように思えます。また、屋根にアールをつけたことによって、どっしりした中にも軽快さが生まれたように感じます。玄関廻りやバルコニー、デッキ等に木材を使用したことによって、木材の持つ柔らかさで、あたたかな印象も付加できました。車庫上のバルコニーは、広々として羨ましいですね。テラスのデッキに階段をつなげて、子供達は大喜びと思います。全体的な形状や、個々の部材の使い方や色の使い方など、作品全体にバランスがとれていて、たいへんに良い作品になっていると思います。

金属サイディング施工例写真コンテストは、日本金属サイディング工業会加盟8社が、全国の設計事務所・工務店・板金店の協力を得て、金属サイディング普及活動の事業として実施しているもので、第10回は全国から1,276作品の応募がありました。新築及びリフォームで建物の外装に金属サイディングを使用したものを対象とし、新築では建物の意匠性・高級感・コーディネート感覚など、トータルでバランスのとれた作品、リフォームでは『施工前⇒施工後』で優れたイメージアップの見られる作品を審査委員会で選考しました。その結果、最優秀賞2作品（新築・リフォーム各1件）、優秀賞は8作品（新築5件、リフォーム3件）、入選賞40作品（新築25件、リフォーム15件）が選ばれました。

なお、今回は応募作品件数に応じ東日本大震災被災地へ義援金の寄付を行うことを決めており、3月1日に日本赤十字社に義援金127,600円を寄付致しました。

[審査委員会]

- ・特別審査委員 江口恵津子（(株)ヴェルディッシモ代表取締役、インテリアコーディネーター）
- ・特別審査委員 杉田宣生（一級建築事務所HARUハル建築研究所）
- ・当会審査委員（理事・幹事・技術委員・事務局）

審査結果報道発表会

記者発表会会場写真



施工前

リフォーム部門 最優秀賞

(株)北国増改センター（富山県）

古民家再生リフォーム。
シックな色のタイル調サイディング採用により、
現代的な和風モダン住宅へ変身。



高橋 護さん(常務)

築50年のお住まい。ご両親がご子息に残すためリフォームをしたいのご相談を受けました。建て替えも検討されておりましたが検査したところ、土台・柱など主要部の耐久性に問題はなく、コスト面を考慮しリフォームをご提案しました。外装は勿論、耐震補強・サッシ・オール電化など、新築と変わらない完成ぶりにお客様も大変喜ばれ、お手伝いさせて頂いた事に、心から感謝とやりがいを感じました。そんなお手伝いから、この様な素晴らしい賞まで頂いた事は誠に光栄な事です。今後もお客様との触れ合いの中で、何に不便を感じ、どの様にされたいのか、それをプロの目線からどの様に提案する事がお客様の為になるかを真剣に考え、地域の皆様に貢献できる様な会社を目指して参ります。



施工後

●江口特別審査委員のコメント

まさに劇的です!リフォームの力は無限大です。しかしこちらの作品は、ただのビフォーアフターではなく、しっかりとデザインされているので、より劇的であると思われます。瓦屋根は以前一度、かえていますかね。そこから色を合わせて、サッシュ枠、玄関ドア、雨どいと決めていき、それにあう金属サイディングを決めていったように思います。家の持つどっしりとした歴史を継承して、モダンな日本家屋に再生していただけました。品の良い、無理やりではない、劇的なリフォームです。ただ、2階の室外機置き場は、玄関上部は避けたかったところですね。

●杉田特別審査委員のコメント

とにかく劇的に変わったという印象を受けました。ももとの建物は、土壁の真壁構造の住宅ですから、かなりの築年数の建物と思われそうですが、今回のリフォームで、まったく『新築住宅』の印象です。写真で見る限りでも、基礎の補修や、外壁・開口部の改修交換工事と、かなり大がかりな工事となったものと思いますが、ほんとうに生まれ変わりましたね。もちろん、老朽化していればいるほど改修後は劇的に変わりますが、どこかに『古さ』が残りがちです。しかし、この作品には、その『古さ』が感じられませんでした。『劇的』に、かつ『古さ』も払拭した作品ということで、今回のリフォーム部門の最優秀賞に推薦させていただきました。ただし、これからの日本は、長く住み続けられる住宅が必要となっています。そのためには適時適切なメンテナンスは欠かせません。今回の受賞を機会に、ぜひ日常的なメンテナンスを心がけていただけるように御施主さんにお勧めいただければとも思いました。



新築部門 **優秀賞**
(株)モリタ装芸
 (新潟県)



新築部門 **優秀賞**
三角美弘建築設計事務所
 (埼玉県)



新築部門 **優秀賞**
(株)LIXIL住宅研究所
アイフルホームカンパニー
 (東京都)



新築部門 **優秀賞**
藤本克之建築設計事務所
 (兵庫県)



新築部門 **優秀賞** **ing環境設計室** (宮崎県)



リフォーム部門 **優秀賞**

(株)ハートフルホーム (北海道)



リフォーム部門 **優秀賞**

buur (東京都)



リフォーム部門 **優秀賞**

(株)住居時間 (愛知県)



[入賞施工例はこちら](#)



善福寺川治水施設

ファインスチール
を使った
**建築
設計例** 303

川に寄り添う家

五角形のたたずまい

設計：水石 浩太 / 水石浩太建築設計室

(表紙の写真は、新建築社写真部撮影 © その他の写真は、Hiroshi Tanigawa/谷川 寛氏撮影 ©)

川のほとりに たたずむ五角形

東京都杉並区、善福寺川のほとりに建つ、シャープな五角形の一際目を引く住居が、今回紹介する川に寄り添う家である。

新居を構える際、元々はマンションを考えていた一人の子を持つ若い夫婦が、どうせならしっかりと住み続けられる住まいを持ちたいと希望し、近所に設計室を構えていた水石氏に直接依頼を持ちかけた。予算では不整形な土地しか入手できないかもしれない。それでも設計してくれるか、と相談したところ氏はこれを快諾し、一年後に実現へと至った。不整形な土地でも、快適で魅力的な空間が作れる、という事を十分に指し示す作品に仕上がっている。

制限に対する挑戦

敷地のそばを流れる善福寺川は、以前は水害が多い川であった



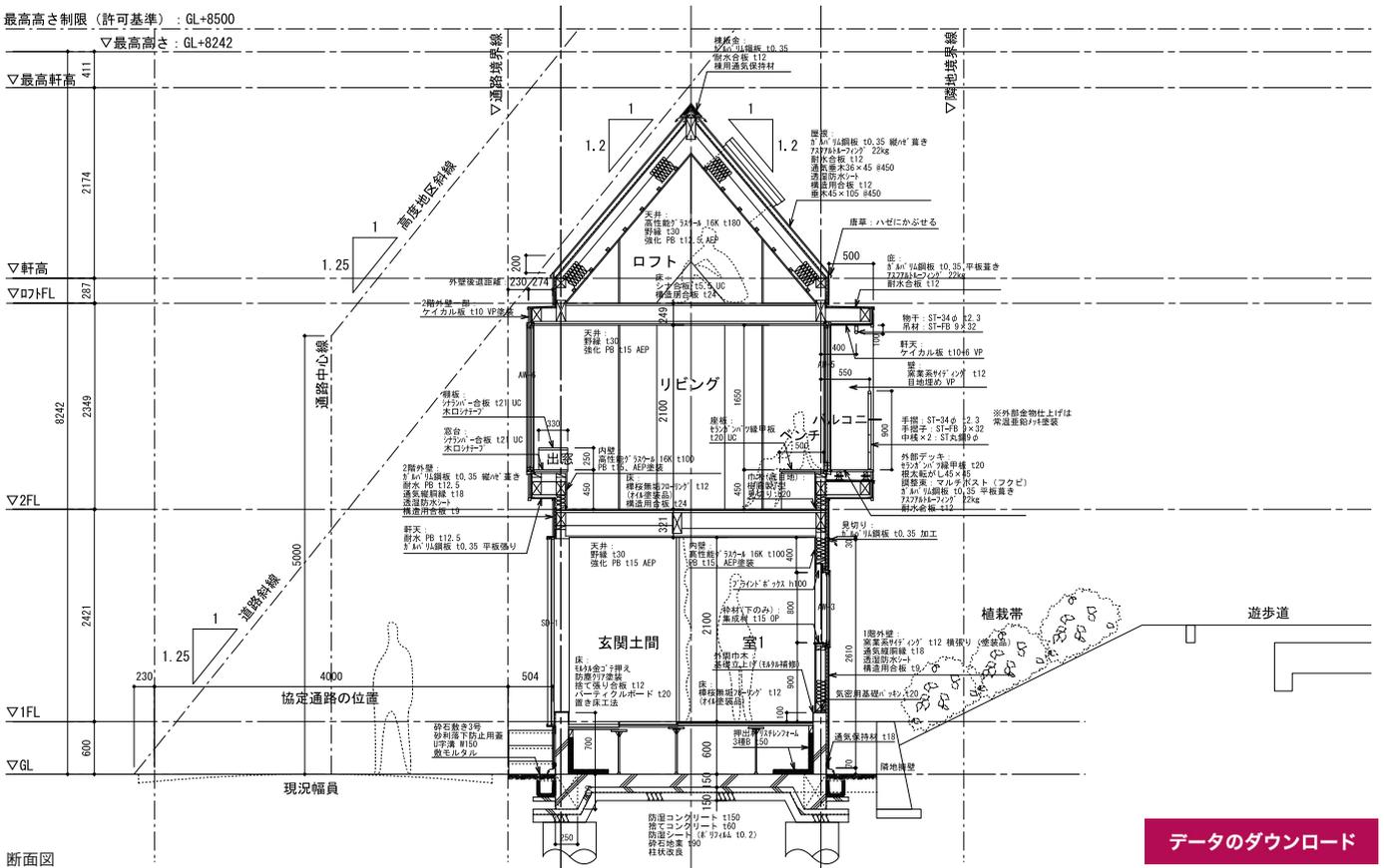
回転させる

南側から外観をみる

が、護岸工事が進み、今ではきちんと整備された環境となっている。

しかしこの護岸工事のために、元々不整形なこの敷地が更大きく削られることとなり、一層建築可能な面積は減ることとなった。前面道路は協定通路のため、法的な制限も大きく、設計が可能な空間はごく限られていた。こうした敷地の形状に大きく制限をかけられ、

外形の取れうる形はほぼ決まっていた。設計の初期段階では、敷地いっぱい三角形のボリュームを取っていたが、施主の夫人からの要望を取り入れ、鋭角部分を切り落とし、五角形の形状を取ることになった。結果として周囲に対して鋭すぎるイメージを与えない、柔らかな印象の家へと仕上がった、と氏は語る。



開放的な出窓

切り落とした部分を開口部にすることで、川を真正面に捉えるだけでなくその川上、川下も眺められる形となり、開放感も大きく増した。施主からの要望を汲み取った氏が、さらにアイデアを膨らませて作り上げて生まれた形である。外部からの視線ができる限り気にならず、かつ外部への展望の良さを追い求めた結果この形が生まれたという。他にも様々な所に氏の工夫が光る。例えば構造的な面では、

必要な壁量を満たしつつ空間として可能な限り広く作り上げるために、耐力壁をそのまま出窓と一体化させた。この工夫によって、内部空間には最低限の壁しか存在しない作りとなっている。さらに空間を大きく見せるために、この壁は空間を緩やかに分断させる程度に留め、全体を一つの空間として感じさせる作りにしつつも、天井の高さを変えることで、異なる印象も与える空間となっている。

この出窓の内側は下部が作り付けの棚となっており、普段はベンチ

として使用できるが、窓を開放することで広々としたバルコニーとして使用することが可能となっている。法規の制限が厳しいこの敷地の条件を逆手に取った、こうした種々の工夫によって想像以上に豊かな空間が内部に広がる。

細部へのこだわり

外部の素材に関しても施主との相談で決まっていたと氏は語る。元々氏はガルバリウム鋼板をその素材感と信頼性から、自身の作品の中によく取り込んでいるが、今回は施主側の要望で外壁と屋根に採用したという。

インテリアとCG関係の仕事をこなす施主の夫婦は、素材の色味等にもこだわり、使い勝手の難しい茶色のガルバリウムカラー鋼板を上手く使い、上品かつ周囲に溶け込む色合いに仕上げている。全体を一色で統一すると雰囲気に重みが出てしまうため、下部はサイディングを採用し、軽い印象を醸し出しているところに、施主の意見を踏まえた上での氏の感性が垣間見える。窓種や内装に関しても奥さんの意見が所々取り入れられ、内外共にこだわった作品となっている。

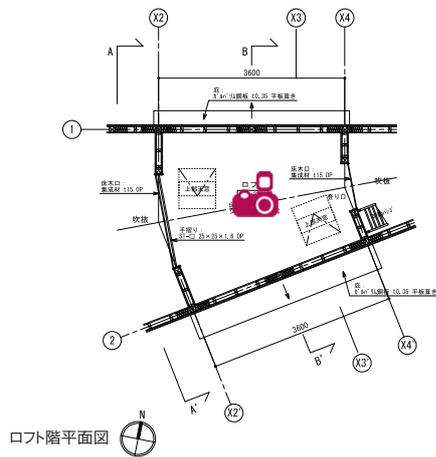
味のある素材

水石氏はガルバリウム鋼板について、「素材自体の信頼性がすごく高い。だからこれまでの作品にも多く取り入れてきた。特に他の素材と異なる点として、屋根と外壁の両方に使用できる、ということ。一体感のある仕上がりを作れる」と語る。しかし、やはり職人の個人差に左右されるところは大きな悩みのようだ。

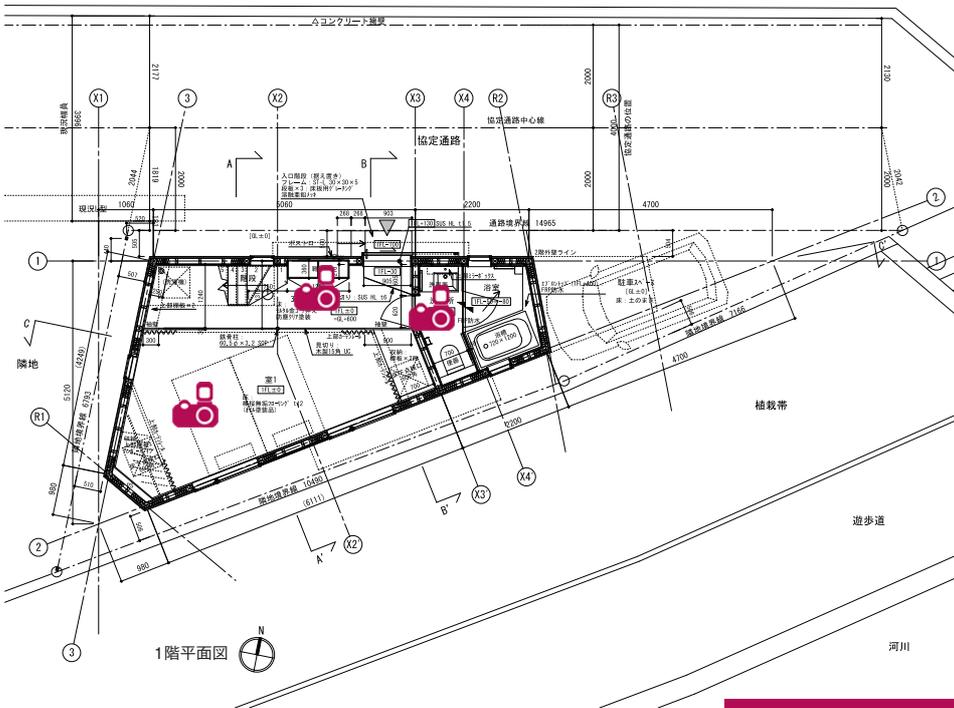
「加工の難易によって職人毎の差が激しいので、思う形に仕上がらないこともある。職人の腕が確かでない場合はカシメ跡が心配な

2階キッチンよりリビングを見る





1階寝室



データのダウンロード

ので、2度折せずに仕上げてもらいたいこともある。よい職人と知り合えるかが大きな問題ともなる」と氏は語った。また「カシメ跡や重なり部分の僅かな膨らみもガルバリウム鋼板の味。むしろ最近の成型品の吊子を取めるための加工線が最終的なデザインの邪魔になる場合もある。毎回吊子の加工のないガルバリウム鋼板を探すことになるから、できれば線のあるものとならないもの、両方を常に作ってもらえるような体制が整うと建築家にとっては使用の幅が広がると思う」と、最後に氏は施工性だけではないガルバリウム鋼板の魅力と可能性について提言した。

緩やかにながれる

現在、施主には第二子が誕生し四人家族となった。当初は予定していなかった家族構成ではあったものの、子供たちはロフトの部分を存分に活用し、夢の広がる遊戯スペースとして利用している。

建築家と施主のこだわりから生まれたこの作品は、双方の想定を超える使い方をされ、今後もより面白みと深みを増していく。

設計：水石 浩太（水石浩太建築設計室）

水石浩太建築設計室 / 〒166-0015 東京都杉並区成田東2-33-12 1F

[tel] 03-6315-1121 [fax] 03-6315-8518 [e-mail] mail@miz-aa.com [URL] http://www.miz-aa.com/

レポーター：東京大学 大月研究室 栗野 悠 (M2) 泉谷 春奈 (M1)

① ルーバー

フィンまたは羽根板という扁平で細長い板を、垂直または水平に組み合わせ、窓などの関口部の前面に設けたものをルーバーといいます。

ルーバーは固定式のものと同可動式のものがあります。固定式はルーバーは動かない構造ですが、可動式はルーバーが太陽の高度(角度)に応じて日照を調整出来るようになっています。

また日射だけでなく人工照明の光線を直接室内に照射させないで、ルーバーに乱反射させることにより柔らかい照明を作ることが可能になります。

応用例としては窓の室内側に設けられるブラインドがありますし、庇の屋根をルーバーとしたルーバー庇があります。

また天井全面にルーバーを取り付け、下から見上げたときルーバーだけが見え、その裏側は直接見えないようにしたルーバーロールという方式があります。

さらには、屋被を通常の工法で葺き屋根の機能を負担させ、その上にルーバーを取り付け、地上から屋根を見たときはルーバーが作る優美な曲線だけが見えるように設計された例もあります。東京の千駄ヶ谷に建てられた国立の能楽堂がそれです。

屋根の機能と意匠を見事に分けた例といえます。

〈参考文献〉

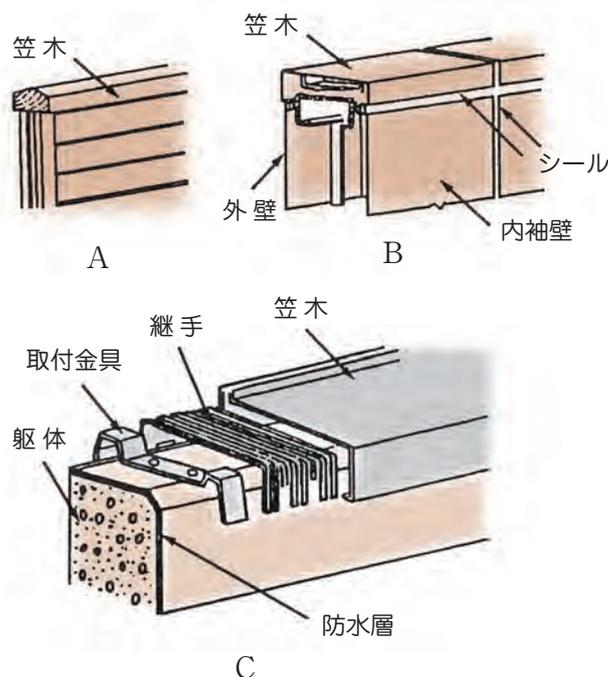
建築用語辞典 1976年9月20日 (株)技報堂発行

② 笠木 [かさぎ]

手摺、塀、腰羽目などの最上部分に設ける横木や横材を笠木といいます。また鳥居の最上部の横木も笠木と呼びます。

板金工事では、ビル屋上の手摺壁の天端に図 B のような笠木を取り付けます。板厚は 0.8mm から 2.3mm 程度で加工し、取り付けられます。この場合、笠木を設ける総長さを等間隔に割り付け、継手は目地を設け、ここで取り付けます。目地はシーリングで充填します。この方法は取り付けボルトやリベットは表面に露出しません。

最近ではアルミニウムの押し出し型材の笠木が多くなりました。図の C がアルミ笠木の例です。



〈参考文献〉

建築用語辞典 1965年7月10日 (株)技報堂発行
アルミ笠木カタログ パイロット万年筆(株)発行

③ 馳締器 [はぜしめぎ] ※心木なし瓦棒葺き、立平葺き用

心木なし瓦棒葺きや、立平葺きなどの馳を締めるために用いる工具を馳締器といいます。通常は手動式のもので、作業者は馳締器の柄に体重を預けるようにして作業を行います。これらの馳締器は馳締め工程に応じて 1 番馳締器と 2 番馳締器とがあり、1～2 の順に使います。馳締め作業は馳締器の刃をラップさせながら連続締めして行われます。

なお馳締器は、別名「ガチャンコ」、「ガッチャ」とか「ガチャ」などとも呼ばれ、これより馳締め作業のことを「ガチャ締め」とか「ガチャンコ掛け」ともいわれます。

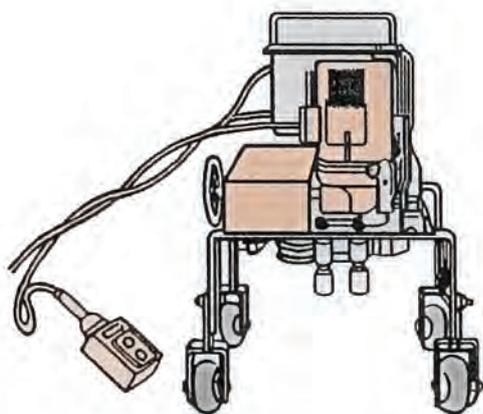


4 馳締機 [はぜしめき] ※馳締形折板葺き用

馳締形折板の馳を締めるには電動式の馳締機を用います。折板葺きの場合は、板厚が瓦棒や立平葺きより厚いため手動式では作業が困難なため機械式となっています。

この馳締機は電気モーターを動力にし、馳の形状に応じた小さい径のロールと走行部分からなっています。馳締め作業はこのロールで連続的に行われます。またロールは馳締め工程に合わせ調節できるようになっていて、1回目と2回目はロールの間隔を変えることによって行います。

このような電動式馳締機とは別に、手動式のものが用意されています。これはいきなり電動式馳締機を掛けると馳が正常に締めつけられないことがあるので、事前に手動式馳締機で部分的に締めておく必要があるからです。



5 表面結露 [ひょうめんけつろ]

冬になると窓ガラスや水道の蛇口、コンクリートの壁、さらには金属屋根板の裏面に水滴が付着します。このような物体の表面に結露することを表面結露といいます。

結露が起こるのは、空気の相対湿度が100%以上になったとき発生しますが、この100%のときの温度を特に「露点温度」と呼びます。つまり窓ガラスの表面温度が露点温度以下になったとき結露が起こります。

結露は、水滴が物体の表面に付着するケースと、物体の中に発生するケースの二通りがあります。表面に付着する場合を表面結露、中に発生する場合を内部結露といいます。

金属板やガラスのような水を吸収しない材料の場合は表面結露しか起こりません。しかし、ガラス繊維

や木毛セメント板などのように水を吸収する材料の場合は表面結露と内部結露が起こります。

結露防止を行う場合、表面結露だけは比較的容易に処置が可能ですが、内部結露がある場合は厄介なことになりがちです。

色々な断熱材の中、発泡ポリエチレンや発泡硬質ウレタンのように気泡が独立しているものはほとんど水を吸収しないので、内部結露の心配はありません。しかし、吸水性の大きな繊維質の材料やセメント系の材料などは内部結露の検討が必要です。

6 透湿係数 [とうしつけいすう]

材料内を水蒸気が透過する場合のことを透湿性といいます。

透湿係数は、材料の透湿性を表わす単位の一つで、一般に $(g/m^2 \cdot h \cdot mmHg)$ を用います。つまり、材料が均一の厚さのとき、単位面積 (単位は $1 m^2$) 当たり、材料を挟む両側の水蒸気圧が単位圧力差 (単位は $1 mmHg$) のとき、単位時間 (単位は 1 時間) 当たりに透過する水蒸気の量をいいます。

屋根の場合、例えば折板の裏面に断熱材を貼ったとき、透湿係数の大きい材料では材料の中で内部結露が発生し易くなります。その結果、断熱材の断熱性が低下します。逆に透湿係数が小さい断熱材の場合は、内部結露は少なくなります。

グラスウールは透湿係数が大きく、発泡ポリエチレンは透湿係数は小さくなります。従ってグラスウールより発泡ポリエチレンの方が結露に対して有効といえます。

透湿係数に関連して、次のような単位があります。

透湿抵抗 …………… 透湿係数の逆数 $(m^2 \cdot h \cdot mmHg/g)$

透湿率 …………… 透湿係数のディメンションの内材料の厚さを単位厚さ (単位は $1 m$) としたときの水蒸気の透過量 $(m \cdot h \cdot mmHg/g)$

透湿比抵抗 …………… 透湿率の逆数 $(g/m \cdot h \cdot mmHg)$

*記載の単位は用語集作成当時の単位となっていますが、現在はSI単位となっています。ご使用の際はご注意ください。

訂正とお詫び

本誌2012年夏号「板金工事に関する用語集」のP9「①アスファルトルーフィング」部分21行目と、P10「④熱伝導率」部分1行目に誤りがありましたので、深くお詫びして訂正させていただきます。

P9 (誤) 例は多い P10 (誤) 比例定数で
(正) 例は多い (正) 比例定数で

テーマ建築⑩

現代アートな家

工学院大学建築学科
藤森研究室

担当 丸山 ^{もとこ} 雅子

2001年秋に「シンデレラ・リベンジ」(西武ギャラリー)というミステリアスなタイトルの展覧会を観た。イタリア人デザイナーのサミュエーレ・マツツァが企画したもので、色も形も素材もさまざまな靴が150点展示されていた。出品者は靴や服飾デザイナーを中心に、他の分野のデザイナーや現代アーティストも含まれ、作品はどれも靴ということは一目でわかるが、履くことの叶わない、履くことを拒否する靴だった。「履けるものなら、履いてごらん」という展覧会のキャッチコピー通り、靴の姿をした魅惑的なオブジェが私たちに挑発していた。

この展覧会は当然のように、岡本太郎の「座ることを拒否する椅子」(1963年)の一連の作品を連想させた。椅子をテーマとする現代アート作品は多そうだし、そういう作品を集めた展覧会も容易に想像できる。では建築ならどうだろう。



図1 三鷹天命反転住宅(荒川修作,2005年,三鷹市)
荒川修作による分譲集合住宅。色と形が強烈だが、内部を見学したところ、住みやすそうだった。

第一に、住めない現代アートな家はあるや否や。ここで欠陥住宅やシックハウスなどの問題を抱えた物件を思いついてもらっては困る。私が考えているのは、家の姿をして、そこに入りたいと思わせるのに、到底住めない、超然としたアート作品である。

過去の有名な住宅作品で、現代アート風のものと言えば、毛綱毅曠の「反住器」(1972年)が思いうかぶが、これは建築家が母親のために建てたもので、人を拒む家ではない。同じく型破りな家として有名な石山修武の「幻庵」(1975年)や安藤忠雄の「住吉の長屋」(1976年)も、施主とその家族によって長年使い継がれているからには、居心地が良いのだろう。私は「住吉の長屋」を原寸大模型でしか経験していないが、建築時に問題視された不便さを補って余りある魅力を感じた。それによく考えれば、これらは私の探している物とは逆である。家に見えない家ではなくて、誰が見ても家なのに住めない家を探しているのだから。



図2 House before House(藤本壮介,2008年,宇都宮市)
東京ガス主催「SUMIKAプロジェクト」の実験住宅の一つ。公開後売りにだされたが、未だ住み手が現われていない。築4年未入居、東武宇都宮駅徒歩16分で2550万円(2012年9月現在)。

第二に、建築家に限らずアーティストを世界中から集めて、家をテーマとする現代アート作品を展示することはあるや否や。もちろん、模型作品を並べた従来の建築の展示や、複数の建築家が参加した宅地開発のような実用的なプロジェクトとは違う。野外美術館に彫刻が、野外博物館に歴史的建築物が配置されるように、広大な風景の中に家の姿をした現代アート作品が展示されるということである。

第二の疑問については、どのようなものになるか大体想像できたし、兆しも見えていた。同じ頃横浜で「横浜トリエンナーレ2001」が華々しく開催され、「シンデレラ・リベンジ」とは何桁も違う予算

と空間が現代アートに投げられるのを見て、実現は遠くないかもしれないと思った。だが「横浜トリエンナーレ2001」で私の探し物は見つからなかった。



図3 家の記憶(塩田千春,2009年,十日町市)
越後妻有アートトリエンナーレの「空家プロジェクト」の一つ。東京23区より広い地域に、30棟を超える「空家プロジェクト」作品が点在する。

その後、世界的に著名なアーティストの荒川修作が「三鷹天命反転住宅」(2005年)を完成させ、同じ荒川の「養老天命反転地」(1995年)を体験済みだった私は小躍りして見に行ったが、予想に反して、住みやすそうな家だった。

そして2006年秋の「愉しき家」展(愛知県美術館)はまさに家をテーマとする現代アートの展覧会だった。美術館の屋内のみの展示だったが、それぞれの作品に小屋が建つほど広い空間が与えられていた。そこで気になる作品を見つけた。塩田千春の「窓の家：第三の皮膚」(2005年)は約500枚の窓を貼り合わせて家を形づくったもので、窓は建築の解体現場で廃棄されるのを作家自身が拾い集めたものだという。サブタイトルの「第三の皮膚」とは、第一の皮膚が人間の皮膚、第二が衣服、そして第三が家だという。それなら、中に入るしかない。

建築家の作品では、藤本壮介の「House before House」(2008年)が気になった。約2.5m角の箱が10個、三層に積みあがった構成で、箱のそれぞれに居間、台所、浴室、寝室、子供部屋などが納まり、部屋から部屋に移動するたびに箱の外に出て階段を使う。箱の外だが、生活動線なので、家の中と言うべきか。家に居ながら家の全周囲が家の延長にある、景色が目まぐるしく変わる家だ。冒険心をくすぐられるが、住むには躊躇する。だが、人を拒む家ではないし、元は東京ガス主催の「SUMIKAプロジェクト」の実験住宅なので、実用性はお墨付きだろう。

設計者が試しに一泊して、「何て居心地がいい家なんだ」と感心したそうだから、住んでみれば案外、「住吉の長屋」と同じ感想を持つかもしれない。

さて今年の夏、私は初めて「越後妻有アートトリエンナーレ」を見に行った。目当ては「空家プロジェクト」である。空家を修復し維持すると同時にインスタレーションアートを施して展示するもので、越後妻有ではマリーナ・アブラモヴィッチの「夢の家」(2006年)を第一号とする。越後妻有から遠く離れた瀬戸内海の直島では、同様の「家プロジェクト」(こちらは空家に限らない)が1998年に始まり、徐々に数を増やして近隣の島にも及んでいるが、後発の越後妻有の方が数を伸ばしている。今回はその約半数を見学した。プロジェクトの性格上、修復されて問題なく住める家が多かったが、そうでないものもあった。塩田千春の「家の記憶」(2009年)は、家中の柱、梁、壁に、黒い毛糸が蜘蛛の巣状に幾重にも張りめぐらされ、目を凝らすと生活用具も編みこまれている。空家が失くしかけていた家の記憶を再生して繋ぎとめているかのようだ。空家とインスタレーションアートの見事な融合だが、長居するとやがて毛糸に取り込まれそうで、怖くて住めない。アートの力で家から弾き出されてしまう。私は探し物を見つけたのかもしれない。

これとは別にもう一つ嬉しいことがあった。「越後妻有アートトリエンナーレ」ではさまざまな分野のアーティストに混じって建築家の活躍が目立っていた。私が数えたところ、出品者310組のうち26組に建築家の名前があった。



図4 家の記憶、内部
家の柱、梁、壁一面が黒い毛糸で張り巡らされ、家の記憶がつなぎ留められているようだ。

現代アートな家についての私の第二の疑問も、思っていたより早く実現しそうだ。

街でみかける ファインスチールの施工例 その12



三 八木澤商店 一関工場

文化4(1807)年創業、陸前高田で200年以上にわたって醤油や味噌を製造している『八木澤商店』。昔ながらの梔子絞りで作った「生揚醤油」や地元産の丸大豆を利用した「おらほの味噌」など、八木澤が作る「本物」は全国に根強いファンを持っている。だが、2011年3月に太平洋三陸沖を震源として発生した大地震と大津波で、本店・工場・蔵が全壊・流失し再建は絶望的であった。しかし、「醤油づくりの火は消さない」その心意気で、政府の雇用調整助成金を活用するなど社員の雇用を守り続け、急ピッチで会社を再建。「震災復興のシンボル」的な地域密着型企业として注目される中、今回政府の補助金を活用し、一関市大東町の旧大原小学校跡地に、つゆ・たれ製造棟、原料処理棟、生産処理棟、合せて延べ約1,500㎡の工場を建設。2012年10月13日、新築工事竣工式が行われた。入母屋造りの同工場は、



卯立(うだつ)や海鼠(なまこ)壁がある白壁と、つや消しブラックのカラーガルバリウム鋼板を使用(使用料:1,500㎡)した屋根の、背後の山景に溶け込むような蔵を意識した古風な外観となっている。



地図を見る

2 三井アウトレットパーク倉敷

中・四国最大級の本格アウトレットモール『三井アウトレットパーク倉敷』は、岡山県 JR 倉敷駅前前の「倉敷チボリ公園」跡地に三井アウトレットパークシリーズの 11 施設目として、2011 年 1 月 27 日に着工し同年 12 月 1 日にグランドオープンした。

「倉敷の森」をデザインコンセプトに、水と緑に囲まれた心安らぐ環境共生型空間を演出した約 66,000 ㎡の敷地内には、アウトレット“日本初出店”6 店舗、“中国地方初出店”112 店舗を含む 120 店舗が出店。屋根材としてのガルバリウム鋼板 410 トンと、壁材としてのガルバリウムカラー鋼板 80 トン（屋根・壁あわせた建屋容量は約 50,000 ㎡）が、ショップの屋根・壁に彩りを添えている。

有力セレクトショップをはじめ、国内外からレディース・メンズファッション、キッズ、スポーツ&アウトドア、アクセサリ、ファッション雑貨など、さまざまなジャンルが集結。よりすぐりのハイクオリティな商品をアウトレット価格で提供している。



スライドを見る



2012年秋号より 季刊広報誌「ファインスチール」の WEBマガジンが登場します!



長年みなさまにご愛読いただいている季刊広報誌「ファインスチール」が、Webマガジンとして2012年秋号より登場します。

本誌では見れなかった建物の立体イメージや、掲載しきれなかった写真もスライドとしてご覧いただけます。さらに、バックナンバーの記事もキーワード検索できるなど、Webマガジンならではのコンテンツが盛り沢山です。ぜひ一度、ファインスチールWebマガジンを体験してみてください。

下記URLよりアクセスできます。

<http://www.finesteeel.jp/>

ファインスチール

●外観CGイラスト



●スライドショー

